ズオーの家族

みずのおに

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、ズオーとロミアは幸せに過ごしていたが、
ディステルとラジョアが奇襲してきた。
彼らの運命は…？

目　次

ズオーの家族

わたしはズオーお父さんに拾われて大切に大切に育ててくれた。
凄く嬉しいけど、ある日、薄暗い天気のお父さんの城の中で
水属性らしき龍契士さんに、
貴方は誰ですかと聞くと、道具に名乗る必要は無い
と答えられて酷く傷ついた。
お父さんもだいぶ抵抗してくれたのに龍契士さんがとても強くて、
お父さんでも勝てなかったの
「貴様ら、龍契士共、我が愛娘に何をする！」
とお父さんが問いかけたけど、
水属性らしき龍契士さんはまたわたしのことを道具扱いして
「ふふふ、この道具を使わして貰うわ」
と言ったの　この人きらい！
「貴様！　我が愛娘を！　」
アーミルさんとスカーレットさんはわたしの安否を聞いてくれたの
「「姫様、大丈夫ですか!?」」
姫様！とゆって駆け付けてくれたもう1人の龍契士さん、
リクウさん　彼は火属性なのだから、水属性らしき龍契士さんとは相性が悪いの　リクウさんは　口で諦めたほうがよろしいかと　と問いかけてくれた
しかし　鎧の龍契士さんに抱えられて　どっか連れられた…

「おのれ龍契士共！　特にディステル！　」
「我が愛娘を道具扱いしおって！　許されると思うな！　いずれ我が愛娘を連れ戻す！」
アーミル「私も彼らを許せません　共に行きましょう」
スカーレット「私も許せないわ　私を遊び相手にしてくれた恩恵を！」
「うむ、我が愛娘を連れ戻すためにアーミル、スカーレット　来てもら

う！」
「ズオー様のために全力を尽くします。」
ズオーは我が愛娘のために必死で特訓し、強化を重ねた。
我が愛娘が連れ去られて、自分の力の弱さを思い知った。
リクウは彼らの行動を、とめたいと思っていたのでズオーに仲間に入れてもらえた。
リクウは彼らの行動をこう予測する。
「彼らはロミア様を鍵とわかって　それらの鍵はイルムの天空への鍵である。
恐らく彼らはそこへ向かったのでしょう。」
イルムと聞いてズオーは反応する
「ほう　我が敵の城か。　そこへ向かったのか。」
「ロミアを連れ戻す。」
そこで覚醒した。
覚醒ズオー　悪魔／体力／攻撃　　闇闇属性
「我が愛娘のために行くぞお前達！」
「御意！　私たちの姫様のために！」
「僕は彼らの行動を止めるために！」
少し空を飛んで間もない頃、
彼らに出会った
「何度戦ったって一緒だ。おまえ達は弱い。」
「スキル発動、龍活の霊薬！」
「我がスキル発動！　カオティック・コール！」
運良くそこにはコンボし易いように闇火木が並んだ。
組むぞ！
「闇列を加えて残りは闇火木ドロップをバランスよく！」
お連れは　リクウ（火）　スカーレット（火闇）、アーミル（木闇）と
パーティもバランスよかった。
コンボ数は８＋闇列
ディステル達に攻撃をする

ドラゴンキラーが発動し、ディステル達は瀕死に行った。
「なぬ、こいつらなかなかのものだぞ、」
「ああ、俺達もやばい。」
最期に2コンボで倒れた。　そして逃げた。
逃げる際にズオーの愛娘、ロミアを落とした
「ロミア！　」と叫び、ズオーは走った。
「「姫様！」」
「お父さん・・・　ありがとう　助けてくれて。」
「愛娘よ！　よくぞ無事で！」
リクウ「これにて失礼します　私は彼らの後を追います」
「ありがとう、リクウよ。　後は頼んだ。　我らは城へ戻る。」
「お父さん、少し強くなった？」
「うん、覚醒したぞ。　ロミアを助けるべくな。」
こうして、ロミアは助かり城では大切な家族団欒（かぞくだんらん）が繰り広げられていた。
―完―